



第30号

2025.3

青少年赤十字

賛助 ひろしま

青少年赤十字賛助奉仕団信条

1. 青少年赤十字の充実発展に協力奉仕する。
1. 赤十字思想の普及啓発に努め、平和な社会の実現に寄与する。
1. 志を同じくする人々と手を取りあい、研鑽に努める。

発行 広島県青少年赤十字賛助奉仕団 〒730-0052 広島市中区千田町2-5-64
事務局 日本赤十字社広島県支部 TEL (082) 545-5011

青少年赤十字の活躍に寄せて

広島県教育委員会教育長 篠田 智志



日本赤十字社におかれましては、災害救護、赤十字救急法の普及、ボランティアの育成、血液事業の推進、国際活動への参加など、人間のいのちと健康、尊厳を守るための様々な活動に取り組み、社会活動を支えていただいていることに、心から敬意と感謝の意を表します。

さて、青少年赤十字におかれましては、これまで幼児児童生徒が「赤十字」の精神に基づき、世界の平和と人類の福祉に貢献できるよう、日常生活での実践活動を通じて、いのちと健康を大切に、地域社会や世界のために奉仕し、世界の人々との友好親善の精神を育成することを目的として様々な活動を展開されてきました。

例えば、リーダーシップ・トレーニング・センターでは、児童生徒がリーダーとして必要な自主・自律の精神を身につけ、自ら考え、判断し、行動することができる教育プログラムに取り組んでおられます。また、青少年赤十字防災教育プログラムを作成され、未来を担う子供たちが、自然災害の正しい知識をもち、危険から身を守る行動をとることができるよう、防災教育にも尽力されております。

その他、教職員を対象とした指導者養成研修会も開催され、青少年赤十字の様々な教育手法や学習資料の活用、子ども達の自主・自律の精神を育成する方法を体験的に学ぶことができる機会を設定されております。

これらの取組は、県教育委員会において推進してきた、生きて働く知識・技能の習得と同時に、自ら課題を発見し、主体的に考え、他者と協働しながら解決していく力を育むことを目指した「学びの変革」と軌を一にするものと考えます。これからも、青少年赤十字加盟校の幼児・児童・生徒が、自ら課題に「気づき」、課題解決の道筋を主体的に「考え」、解決に向けて仲間と協力して「実行する」力を自分たちの生活の中でも生かしながら、生涯にわたり個性と能力を伸ばし、多様な他者と共生していくことができる青少年の育成に取り組んでいただきたいと思います。

最後になりますが、青少年赤十字の更なる発展と加盟校の広がりに向け、皆様の御支援、御協力を賜りますようお願い申し上げます。

奉仕団と青少年赤十字

日本赤十字社広島県支部事務局長



坂井 浩明

賛助奉仕団の皆様には、平素より青少年赤十字の普及・発展並びに赤十字事業へのご理解とご協力を賜り、厚くお礼を申し上げます。

昨年、2024年1月1日に発生した「令和6年能登半島地震」では大きな被害をもたらし、広島県支部からも救護班やこころのケア班など延べ11班、およそ70名の職員を現地へ派遣しました。

また、9月には能登半島を大雨が襲い二重に被災された方々も多くおられます。被災地では継続した支援が必要であり、日本赤十字社では引き続き、被災され



日頃より、青少年赤十字の活動に携わっておられる全ての皆様に心より感謝申し上げます。

「賛助ひろしま」第30号によせて
広島県青少年赤十字指導者協議会 会長
広島市立国泰寺中学校 校長 重森雅穂

た方々に寄り添った支援を行って参ります。

さて、近年、急激な社会の変化に伴い、学校と地域を取り巻く課題はますます複雑化、多様化しています。学校は生徒のいじめや暴力、不登校の問題、教員の業務量の増加による働き方改革の課題があり、一方、地域においても、家族形態の変化、価値観やライフスタイルの多様化等により地域社会における支え合いやつながりが希薄化しています。

そこで、赤十字として期待される活動を展開していくためには、地域における赤十字活動の推進者であり、地域の実情に精通した奉仕団等ボランティアの参加をより一層促進し、ボランティアの主体的な社会活動を強化していく必要があります。

また、赤十字活動の発展と更なる活性化を図るために、奉仕団と青少年赤十字が連携・協力しながら、広く一般に対して魅力的でやりがいのあるボランティア活動を創出することが大切です。

広島県支部としても、賛助奉仕団の皆様と密接に連携を取り、青少年の育成に取り組んでまいります。今後とも、青少年赤十字活動のさらなる飛躍に向け、皆様のご支援・ご協力を賜りますよう、心よりお願い申し上げます。

ます。

青少年赤十字は、第一次世界大戦中、各国の生徒と教師が、クリスマスカードや手紙などを赤十字を通じて戦地に送った活動を契機に創設されました。わが国では大正11年に誕生し、一昨年度、創設100周年を記念して「100万羽おりづるプロジェクト」が広島県支部によって実施され、子どもたちが心を込めて制作した120万羽の折り鶴が世界最長のギネス記録に認定されました。

広島県青少年赤十字賛助奉仕団の皆様におかれましては、平素より本県の青少年赤十字の普及、発展及び加盟促進に努められるとともに、赤十字思想に関する専門的知識の研修や普及活動にも取り組んでおられ、心より敬意を表する次第です。

また、近年特に力点を置いて取り組まれている防災教育では、本県の土砂災害警戒区域数が全国で一番多く、土砂災害リスクが非常に高いことを踏まえ、広島県に特化した効果的な教材開発を進めておられます。わたしが勤務する広島市立国泰寺中学校は、昭和27年に青少年赤十字に加盟し、「気づき、考え、行動する 実行の人」の育成を教育目標に掲げ、人道的価値観を身に付け広く社会に貢献できる人材の育成を目指し、積極的な教育活動に努めています。また、生徒会活動を中心にVS活動をはじめ、広く青少年赤十字の諸事業に取り組んでいます。

今後とも、赤十字の基本原則「人道の精神」と青少年赤十字の態度目標「気づき・考え・実行する」のもと、活動の一層の充実に寄与したいと考えています。どうぞ宜しくお願いいたします。

令和6年度広島県赤十字大会

(昨年度で、青少年赤十字県大会として行われてきた大会を県内全赤十字団体の大会として生まれ変わりました)

一日時 令和6年10月26日(土) 13時

二会場 広島YMCA国際文化ホール
三 プログラム

ア 開会行事

イ 青少年赤十字加盟校の活動紹介・発表

ウ 奉仕団の活動報告

エ 分科会

オ 閉会行事

1 発表の部

ア 国泰寺中学校

「県大会とトレセンを通して」

3年 日高裕加

広島県赤十字大会では、先輩方や奉仕団の方の活動のことを聞いたり、私たちが学校で行なっている活動の紹介をしました。また、活動紹介の後は大雨災害を予想した「防災プログラム」を行いました。先輩たちの活動紹介では、国泰寺中学校では取り組んでいる活動をしているところが多くあった。コンタクトケース回収など、私たちにもできるような活動をしているところがあった。私はそれらを参考にしながらJRC活動や生徒会活動に活かしていきたいと思った。

また、大雨災害を予想した「防災プログラム」では、他校の中学生のみではなく、大人の方や先生方とも意見交流をする事ができた。そのおかげで、大雨災害について考えただけではなく、自分の視野を広げるこ

とができた。これを受けて私は、もっと細かいことについて考えること、もっと様々な人と意見を交わすことで広い視野を持つことを保っていききたいと思った。



国泰寺中学校 実践発表

夏のトレセンでは、施設内をグループで協力しながら回るフィールドワークをおこなったり、赤十字で行っているボランティア活動についての説明を聞いた。また、最後のワークショップではインターネットを使用しこれからの学校でのJRC活動について考えた。フィールドワークでは、仲間から自分一人では思いつかなかったような考えや案を聞くことができた。また、仲間と協力して何かを行うことの楽しさや、仲間と何かを達成した時の達成感などを感じる事ができた。そのおかげで、仲間と協力し合うことの大切さや楽しさについて分かった。これを受けて、仲間とは私にとって必要不可欠であることが分かった。また、ワークショップ

ではインターネットを使い、学校で行う事ができるJRCの活動について考え、他校の生徒と交流することができた。

広島県赤十字大会やトレセンで学んだことや感じたことを活かし、学校のJRC活動をより良くしていきたい。

イ 広島市立舟入高校の発表

私たち舟入高校JRC部は、主に校内及び校外で活動しています。校内ではペットボトルキャップ回収やベルマーク回収、コンタクトケースの回収を通年行なっています。中でもベルマークは、今までの分も含めて約11万点ほど集めることができました。現在集めたベルマークは、より生徒の皆さんが過ごしやすい学校を作るべく、対象商品と交換するなどして有効活用していこうと考えています。今後ベルマークやペットボトルキャップなどは集めるだけで終わるのではなく、何のために集めるのかといった目的を生徒たちに知ってもらえるような活動も行っていきたいと思っています。

また、今年度は能登半島地震に伴う義援金募金を校内で呼びかけました。そして、集めた義援金を赤十字へ届けに行きました。この活動を通して、私たち部員を含め、校内の生徒の皆さんに「自分たちが行動しなければ」という主体的に行動しようとする意識をもたらしることが出来たと感じています。

続いて校外では、定期的に開催されるJRC高等学校協議会の総会に参加し、他校のJRCメンバーと関わり、互いに学校ごとの取り組みを共有し合っています。そうすることは、新たな発見に繋がり、今後のボ

ランティア活動をより良いものとしてくれます。また、献血の呼びかけや街頭募金などにも積極的に参加しています。



舟入高校 募金活動

これからもトレーニングセンターでの学びやその他の取り組みを通して得た学びを活かしながら、社会のニーズに合う活動を調べ、考えながら、少しでも誰かのために手を差し伸べられるような行動を積み重ねて行こうと思います。

そして今後も引き続き、今まで行ってきた校内外の取り組みを続けるとともに、より広い視野を持って、自分たちだからこそ出来るボランティア活動が行えるよう、部員全員で力を合わせて努めていきます。

県大会参加生徒の感想

今回の県大会に参加して大きく二つ学んだ事があります。

一つ目の学んだことは、様々な学校や奉仕団の方の活動紹介を通して知った、新たなボランティア活動や

実際の被災地の様子についてです。福山赤十字奉仕団の方からは、大地震で大きな被害を受けた石川県でのボランティア活動のリアルな状況についてお聞きすることができ、とても貴重な時間となりました。実際に行った人にしかわからない災害の惨さや支援したくても出来ないもどかしさを肌で感じる事ができました。そして、特に心を動かされたのは中学生たちの活動についてです。学校の中で、自ら気づき・実行するという力を一部のメンバーだけでなく、学校全体で取り組んでいるという点に対しても素晴らしい活動だと感じました。中学生の力強い行動力に私たち自身、背中を押された気持ちになりました。

二つ目に、救急法を通して、声かけの重要性や、正しいAEDの使い方を学びました。「どんな声を負傷者にかけたら良いのか」という問いに対し、会場のみんなで意見交換をすることで、「負傷者が安心できるように、自ら負傷者の心に寄り添う声掛けが大事」という答えを導き出すことができ、このような場でしかできない学びを得ることができました。また、様々な意見をもつJRCメンバーの考えを聞くことができ、自分にはない考えを知ることができました。そして包帯法では、実際の試験のように時間制限を設ける事によってより緊張感を持ちながら行うことができました。そんな中、緊張もあり、誤った位置にAEDパットを貼ってしまったのですが、この練習の場を機に自分の誤りを知ることができてよかったと思います。この失敗で正しいAEDの取り扱い方を頭に焼き付けることができたと思います。

今回の大会での新たな発見や学びを活かしながら、今後もより良い活動を行っていききたいです。

ウ 安田女子大学

「県大会に参加して」

安田女子大学赤十字奉仕団 藤永夕梨華

広島YMCAにて広島県赤十字大会が開催された。今年度は、昨年度までの青少年赤十字加盟校のみの開催形式から一歩進み、学生赤十字奉仕団、地域赤十字奉仕団、特殊赤十字奉仕団など幅広い団体が参加する新しい形で実施された。

前半では、各校・各奉仕団の日々の活動についての発表が行われ、お互いの取り組みを知る貴重な機会となった。多様な活動が紹介される中で、参加者同士がアイデアや経験を共有することで、赤十字活動への理解がより一層深まった。当奉仕団も実践発表を行った。



安田女子大学・実践発表

後半では、中学生・奉仕団と高等学校に分かれた分科会が実施された。中学生・奉仕団は「広島の豪雨災

害と命を守る行動力を育む」をテーマとした防災教育

プログラムを受講した。私が参加したこのプログラムでは、具体的な事例をもとに危険を予測し、安全を守るための行動や事前の備えについてグループディスカッションを行った。グループディスカッションでは、多様な視点からの意見交換が行われ、災害時に求められる冷静な判断力や迅速な行動力、そして事前の備えの重要性を再認識する場となった。また、異なる世代や背景を持つ参加者とのグループワークを通じて、災害時における連携の大切さも学ぶことができた。高校生は、救急法競技大会が実施され、参加者は救急技能の向上を目指し、真剣に取り組んでいる様子であった。

今回の赤十字大会には総勢69名が参加し、多様な団体間での意義深い交流や学びの場となった。この大会で得た学びや繋がりを今後の活動に活かし、赤十字の理念や活動をより多くの人々に広めていきたい。

おわりに、本大会の開催にあたり、ご尽力くださった全ての皆さまに心より感謝申し上げます。この場を借りて深く御礼申し上げますとともに、赤十字の活動が今後ますます発展していくことを心より願っております。

エ 福山市赤十字奉仕団の活動

福山市赤十字奉仕団委員長

過田 悟



福山市赤十字奉仕団は、1997年(平成9年)11月23日に福山市ボランティア赤十字奉仕団として

結成し、福山市ボランティア連絡協議会に加入する会員が、福山市赤十字奉仕団にも奉仕団員として加入

しました。そして、2014年（平成26年）4月1日に現在の福山市赤十字奉仕団に名称変更をし、2024年（令和6年）4月1日現在23名の奉仕団員が活動に参加しています。

新型コロナウイルス感染症が発生するまで実施していた、地域のイベントや防災訓練などで、ハイゼックスによる非常食の炊き出しなどの啓発活動が感染症を契機に全く依頼がなくなりました。そうした中、国内で自然災害が発生した際に、被災地で復旧支援活動や支援物資の提供をニーズに応じて継続して活動しています。

東日本大震災の2年後から被災地より被災者や社会福祉協議会の職員を講師に迎え、講演会や研修会を2年に1回開催し、翌年には被災地にて「被災地視察研修」実施しています。国内外の自然災害に対し義援金と救済金のため、一般会計から毎年「自然災害支援積立金」として4万円積立て、日本赤十字社広島県支部を通して支援活動に参加しています。

また、福山市内の商業施設をお借りして、来店者の皆様に義援金・救済金の協力を呼びかけ、市民の皆様に参加をいただいています。

2 分科会

ア 中学校・奉仕団分科会

「防災プログラム」実施報告

広島県青少年赤十字賛助奉仕団

山中章敬・下野玲子

プログラムの概要

広島県赤十字大会の中学生・奉仕団分科会では、防

災意識の向上を目的として、防災プログラム「広島県の豪雨災害と命を守る行動力を育む」を実施しました。青少年赤十字の中学生メンバーと赤十字奉仕団が協力して、参加者がシナリオに基づいた避難体験を通じて、災害時の冷静な判断力と行動力を養うことを目指しました。

背景と目的

本プログラムは、広島県を襲った2014年および2018年の豪雨災害の教訓を活かし、賛助奉仕団員が作成したシナリオを基に開発しました。過去の災害経験から得られた知見を若い世代に伝え、災害時の避難行動における心理的要因や家族・地域での協力の重要性について理解を深めることを目的としています。

シナリオの内容とねらい

シナリオは、10月の夕方に激しい雨が降り続く中、土砂災害や洪水の危険がある地域に住む中学生が、家族を説得して隣人と共に避難行動に移る場面を設定しました。父親や祖父の「今までは大丈夫だった」という過信、ギブスをした兄や高齢の隣人など、避難に困難を伴う状況も描きました。主人公の中学生は、家族や地域の人々と協力し、避難所へ向かう中で、困難を乗り越え、命を守る行動を取ります。このシナリオを通じて、参加者は避難のタイミングの重要性、過信がもたらすリスク、そして支援が必要な人々への配慮について考え、実際に災害が起こった時の具体的な行動につなげることを目指しました。

プログラムの構成

本プログラムは、以下の3つのパートで構成されました。

導入（15分） 過去の豪雨災害の映像を視聴し、災害

の恐ろしさを実感してもらうことを、プログラムの導入としました。

展開（55分） グループワークを通じて、「災害時の危険」や「適切な行動」について議論し全体で発表するというながれで避難シミュレーションを行いました。
まとめ（15分） グループワークで得られた気づきを共有し、災害に対する避難の大切さを改めて確認しました。



グループワーク 最後の全体発表

成果と課題

参加者の中学生と奉仕団メンバーは、プログラムに熱心に取り組み、活発な意見交換が行われました。展開のグループワーク・全体発表の時間が長引いたため、予定していたワークシートの記入は実施できませんでした。

したが、多くの参加者から「避難の重要性を改めて認識できた」「家族と災害について話し合いたい」などの感想が寄せられました。

今回のプログラムの実施を通じて、プログラムの構成や時間配分など、改善すべき点も明らかになりました。今後は、これらの点を踏まえ、賛助奉仕団では、より効果的な防災教育プログラムへと発展させていきたいと考えています。

イ 高等学校分科会

(兼令和6年度広島県高等学校総合文化祭・

JRC・ボランティア部門大会)

JRC・ボランティア専門部委員長

大門高校 前平芳延

令和6年度は昨年までの「青少年赤十字広島県大会」が発展的に解消し、「広島県赤十字大会」となり、会場も市内中心部のYMCA国際文化ホールとなった。JRC高等学校協議会も新たな気持ちで、10月26日を迎えた。JRC活動の振興につなげるため、平成28年度の「2016ひろしま総文」以降、全国総文協賛部門として開催される年の県代表選考大会として、広島県高等学校総合文化祭JRC・ボランティア部門大会を継続して開催してきた。コロナ禍での県大会中止の時期も形を変えながら今年で8回目となる今大会も、午前中の活動報告部門と、午後の分科会を「救急法競技大会」＝救急法部門とする2本立てで行った。

特に分科会を使つての「救急法競技大会」は広島県における継続的な取組として定着している。夏に行われる「リーダーシップ・トレーニング・センター(以下トレセン)」で学んだ包帯法や、一次救命とAED

の使用法を秋の県大会(県総文)にむけて練習するサイクルが各校で出てきました。先輩から後輩へと受け継ぐことにより、技能及び声掛けなどの心遣いの点でも、年々レベルが向上している。



人体模型を使った心肺蘇生とAEDの競技



緊急時の包帯法の競技

このようなイベント的な手法により、繰り返し取り組み、いざというときに的確に対応できる確かな技能を定着させていくことは、まさに「先見」という赤十字

の視点を生かした取り組みになっていて、喜ばしいことだと考える。

このような大会を進めるにあたり、トレセンでの指導や、当日の審査・指導に当たっていたらいてる賛助奉仕団や日赤広島県支部の皆様感謝するとともに、今後はより多くの高校等がこの取組に関心を持ち、参加してもらえよう輪を広げていきたい。

【第8回(令和6年度)大会結果】

(高等学校部門では活動報告と救急法を参加者で評価した。)

活動報告部門

1位 舟入高校・広島みらい創生高校(同率)

救急法部門

最優秀 広島みらい創生高校Cチーム

優秀(傷病者への声掛け) 舟入高校Bチーム

優秀(チームワーク) 宮島工業高校Dチーム

総合部門 最優秀校 広島みらい創生高校

優秀校 舟入高校・宮島工業高校

参加校…舟入、宮島工業、広島みらい創生、

広島なぎさ(見学参加のみ)

4校21名が参加

(実践報告)

子どもたちが出会う赤十字活動

社会福祉法人光生会保育所ひかり学園

園長 上野則子

保育所ひかり学園の運営母体である社会福祉法人光生会には保育園等が全部で4園あり、すべての園が青少年赤十字に加盟しています。保育所ひかり学園は熊

野町にあり、現在125名の園児がいます。

ひかり学園は毎年5月のアンリー・デュナンの誕生日近くに「青少年赤十字加盟式」をし、年少児を新しく赤十字の仲間を迎えます。その時にみんな花の種をつけたエコ風船を飛ばしています。登録式の日はずいぶん晴れわたっており色とりどりの風船は空高く舞い上がっていきます。子どもたちは「宇宙までいくといいなあ、お返事来るかなあ」とわくわくしながら風船を飛ばします。今年は遠く四国からお返事が2通もきました。顔を見たこともない知らない方が子どもたちのことを思ってお返事を下さったのです。毎年どこかの方がこうしてお返事を下さいます。一緒につけた種からお花が咲いたことを知らせてくださる方もいらつしやいました。ひとつの風船が遠く離れた『誰か』と繋がっていく嬉しさを子どもたちは実感しています。



登録式後、一斉に風船<遠くへ飛んで行け>

そして、毎月「こども赤十字の日」を設けていることに取り組んでいます。例えば、泥の入った水を見せて世界にはすぐに水が飲みたくてもこんな水しかなくて遠い所まで汲みにいかなければならないことを伝えます。子どもたちは真剣な表情で聞いてくれます。

8月は年長が『平和』について考えてくれました。『嫌な時は言葉で伝える、相手の気持ちを聞く』など自分事としてとらえ、一生懸命考えて発表してくれました。健康がテーマの時には手洗いの励行です。「キララ星」の曲にあわせて年長児は、「手のひら洗おう」と年中児や年少児にこんな風になると手がしっかり洗えるよと歌いながら教えてくれました。



年長さんが年少さんに手洗いの手ほどき

幼児だからわからないだろうは大人の思い込みです。子どもの感性は素晴らしく、この時期だからこそ大切に丁寧に育てていかねばならないと私たちは考えています。

「気づき・考え・実行する子ども」の育成を目指す

青少年赤十字活動は私たちの保育が目指すものと一致します。これからも日常の中で子どもたちと共に赤十字の精神を育てていきたいと思っています。

広島県青少年赤十字活動の充実に向けて

広島県青少年赤十字賛助奉仕団

委員長 山中 章敬



広島県の青少年赤十字活動がさらに発展するためには、青少年赤十字指導者や賛助奉仕団・

地域奉仕団の皆さまの温かいご支援とご協力が不可欠です。ここでは、広島県で展開されている青少年赤十字活動の意義と、現在私たち賛助奉仕団が行っている主な活動についてご紹介します。

青少年赤十字活動は、赤十字の精神「人道」を具体的に実行することにあります。「人道」とは、特別なものではなく、誰もが持っている「苦しんでいる人を見たら助けたい」「みんな同じ人間だから助け合おう」という本来のな心情と行動力を表しています。赤十字は、政治や宗教にかかわらず、公平に救いの手を差し伸べることを目指しており、この精神は国際的な視野に立ち、人々の生命を守り、個人の尊厳を尊重することを重視しています。

その精神のもと、青少年赤十字は「健康安全」「奉仕」「国際理解・親善」の三つの実践目標を掲げています。これらの活動を通じて、子どもたちは普段の学校や園での生活の中で「気づき、考え、実行する」態度を大切にし、やがて人道的価値観を体得するきっかけ

けを得ます。

人道的価値観とは、他者の生命と尊厳を尊重し、誰もが共に生きる社会を目指す姿勢を指します。これには、思いやりや共感といった基本的な人間愛の心だけでなく、行動力や責任感も含まれています。青少年赤十字活動を通じて、子どもたちは他者と支え合う大切さと喜びを学び、困難な状況においても相手を思いやり、助け合う行動ができる人間へと成長していきます。

例えば、加盟校で実施しているあいさつ運動は、学校全体の雰囲気良くし、子どもたちが互いに尊重し合い、協力する姿勢を育む効果があります。このように、日常の活動の中で青少年赤十字の活動を行うことで、人道的価値観を自然と身につけることができます。

青少年赤十字賛助奉仕団は、「加盟促進」を通じて未加盟校や地域団体に青少年赤十字の活動を周知し、広島県全体でその活動が広がるよう努めています。また、「防災教育の充実」にも注力し、災害に備えた教材の開発やシミュレーションプログラムの提供を通じて、子どもたちが災害時に生命を守る行動力を養う支援を行っています。

広島県青少年赤十字リーダーシップ・トレーニング・センターや学校での実践活動を支援することで、子どもたちがリーダーシップや課題解決能力を高め、他者の生命と尊厳を尊重する心と行動力を育む機会を提供しています。これにより、加盟校や地域での青少年赤十字活動がますます充実し、学校や園の教育活動が活性化し、人道的価値観が地域に浸透し、より良い社会となることを目指しています。

最後に、青少年赤十字活動の発展に、尽力いただいている皆さまに心から感謝申し上げます。加盟校では

人道的価値観が徐々に浸透し、学校や地域、そして社会のために行動できる力が育まれつつあります。今後も広島県の青少年赤十字が発展・充実し、次世代を担う子どもたちの育成につながるよう、引き続きご支援とご協力をお願い申し上げます。

(報告)

全国青少年赤十字賛助奉仕団協議会総会及び創立60周年記念式典に参加して

広島県青少年赤十字賛助奉仕団

副委員長兼幹事長 寺田宣文



本年度は本会の創立60周年記念にあたり、参加者を例年は各県1名のところ、2名の要請があり全国から日本赤十字社本社へ83名が参加しました。

1 役員会 令和6年7月10日(水) 午後

11日(木) 午前(日本赤十字社本社)

(この会議には中国・四国ブロック理事である本県・山中委員長が出席)

委員長が出席

2 総会及び60周年記念式典・講演会

(各県賛助奉仕団委員長ほか1名、本県から寺田が出席)

・令和6年7月11日(木) 午後

・総会 (日本赤十字社本社)

・60周年式典

・60周年記念講演

演題「赤十字とともに70年〜わが人生の暴露〜」

講師 講師、佐藤雅紀(さとうまさのり)

佐藤氏は日本赤十字社奉仕課長(第5代) はじめ多

くの要職に就かれ、現在も日本赤十字社「赤十字情報プラザ」でボランティアをされています。著書には「歴史探訪日本赤十字社の創立」、「佐野常光氏所蔵藤原姓佐野氏系図写」、「佐野常氏家ゆかりの地をゆく」「赤十字ゆかりの地ガイドブック」等があります。話は、戦後の赤十字社入社から赤十字の普及活動とともに歩まれた佐藤先生の人生そのものでした。「青少年赤十字」の創設から「青年赤十字奉仕団」結成に至るまでの歩み、市区町村に奉仕団を結成していった「一般奉仕団から地域奉仕団」への動き、職域奉仕団が特殊奉仕団になっていった経緯など、戦後日本における「赤十字奉仕団」活動を普及・発展させていく上で、何が必要でどういった手立てで発展してきたかがよくわかる内容のお話でした。普及・発展させるためには、いかに指導者を育てることが大切か、創成期にあった戦後の赤十字活動を推進してこられた姿がありました。

佐藤雅紀先生は日本赤十字社で、若き頃の21年間、赤十字奉仕団を専門に担当されました。各支部へ出張しては各県の奉仕団のリーダー育成に努める毎日で、支部を知らなければ本社での指導はできないとの思いが強かったといえます。

「私の学生奉仕団時代の先生との再会」

不肖、私は、佐藤先生と大学3年生の時出会いました。大阪の大学で赤十字学生奉仕団に属していた私は、広島県大和町の青少年スポーツセンターで開催された「西部ブロック青年幹部講習」へ日赤大阪支部から派遣されました。(その理由、出身地世羅町と近いから)その時日赤本社から来られていたのが佐藤先生で、激励や指導をしていただいたのが昨日のように思い出さ

れました。



佐藤先生・前列最右、筆者・2列目右から3番目

当時、集まった仲間は九州・四国・中国の30名ばかりの青奉・学奉の仲間でした。(アルバムから古い写真が見つかりました。)みんなそれぞれ青奉・学奉・看奉の仲間と献血、募金、施設への訪問など楽しく活動していた時代でした。一方、日赤本社や支部は成長期である奉仕団活動のすそ野拡大を必死に取り組んでおられました。

今回の創立60周年記念大会に出席させてもらい、赤十字に一生をささげようと今も精力的に活動されています。

る佐藤先生には頭が下がります。円熟期などありえないのが日赤奉仕団の活動です。日本赤十字社本社・各都道府県支部は戦後、赤十字普及のために指導者育成に躍起となられたことを思い出します。「今こそ、あの頃の熱を再び」の思いで私はこれから活動していきたいと思っています。

3 分科会

令和6年7月12日(金)

会議の目的：賛助奉仕団の現実を見つめ直し、課題を洗い出し、団員の増強、活動の活性化に繋ぐための方策を探る。他県の実況を知る絶好の機会になりました。

令和6年度中国・四国ブロック青少年赤十字賛助奉仕団連絡協議会・研修会(鳥取大会)

幹事長 寺田 宣文

10月24・25日(木・金)に、令和6年度中国・四国ブロック青少年赤十字賛助奉仕団連絡協議会・研修会が鳥取市で開催され、中国9県から青少年赤十字賛助奉仕団25名が集まりました。広島県からは4名の団員が参加しました。

鳥取県賛助奉仕団や支部のみなさんにはお世話になり、2日間を通じて、青少年赤十字活動の発展のため賛助奉仕団の果たすべき役割について、新たな思いを9県で共有する内容でありました。

1日目 第一部

講演「弱くても勝てる 強くても負ける」

鳥取城北高校 校長 石浦外喜義

「一生に一度しかない、三年間」の言葉を胸に、鳥取城北高校で他のどこにもない特別な三年間となるよう取組んでこられた校長先生の講演でした。「生徒一人ひとりのために何ができるのかを考え行動する。」「がんばる生徒たちが、その夢を叶え、卒業というゴールを迎えた時に、生徒だけでなく保護者からも鳥取城北高校で本当に良かったと言っていたきたい。」「石浦校長のお話は私たちの心に突き刺さるように熱を帯びていました。これは、体育教師・相撲部監督として招かれ鳥取城北高校で、いきなりの高校総体・国体で完全優勝。毎年、優秀な選手や現役力士を輩出している鳥取の校長先生の言葉です。「弱くても勝てる 強くても負ける」のお話には、教育の原点・JRCの精神に通じるものを感じました。

第2部 各県の取組についての発表と意見交換

各県の実況ある活動または課題について熱心に協議が行われました。

ここ毎年、話し合われる課題ですが、自らの実践あるのみです。取組むべき課題は数多くありますが、団員自らの積極性にかかっていることを強く感じた協議会でした。

2日目「視察・研修」

岩美町立岩美南小学校訪問

9年前に訪問した小学校は同じ岩美町の岩見北小学校でした。この町では日赤地域奉仕団活動が盛んで、町内の学校への協力体制ができており、他の学校もJRC活動が積極的に取り入れられています。今回訪問した岩美南小学校の石名勝実校長先生は、JRC全国指導者協議会の会長である方で、前述した全国青少年

赤十字賛助奉仕団協議会創立60周年記念大会で挨拶をされました。再びお会いする奇跡が起こると思ってもいませんでした。



校舎正面、全木造で校内も木の温もりと香りが一杯

岩美南小学校は自然環境が豊かで様々な体験学習が展開できる条件がそろっていました。具体的にいうと、山林・田・畑・梨園を学校が独自に所有しているというところで、日頃、町教育委員会やJA、ボランティアなどに整備して頂いていることです。例えば、梨の収穫は3年生行うのですが、地元の高校生、JA、ボランティアの方々がお手伝いに来られるとのことでした。このように何かあると地域にお願いすれば適切な人々が出向いてくださるとのことです。地域と一体となった学校だと伺いました。

初めの校長先生の学校説明の中で、JRC活動が学校の教育課程の中に組み込まれている教育課程表を見

せて頂きました。一般には、教育課程の一部にJRC活動を投げ入れ教材として実施するのですが、この学校ではJRC精神そのものが教育活動になっているわけですから、赤十字縦横無尽とでも申せましょうか。



講師・賛助奉仕団員 担任・授業者

今回6年生の授業を参観させて頂きました。テーマ「防災教育／災害時にあなたはこうする」でしたが、視聴覚機器やタブレットを使ったシミュレーションと併せて班・全体活動が活発に行われていました。この授業の中で、賛助奉仕団の方が講師として加わり、アドバイスやまとめをされていました。事前に担任の先生と何度も打合せを行っておられることが見て取れました。前述の校外学習のみならず学習の面でも緊密な連携をされており、地域と一体となった教育がここにもありました。

この2日間の研修交流会を通して、青少年赤十字賛助奉仕団の活動の重要性や在り方等を改めて認識させ

られ、小学校訪問では、理想とする姿を子どもたちや先生方から見せていただきました。毎年開催される中国・四国9県のこの研修会も重要性を再認識されました。

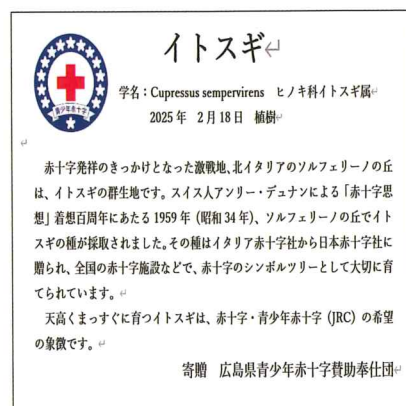
「イトスギ」の植樹

2月18日、海田町立海田西中学校で、赤十字のシンボルツリーであるイトスギの苗と銘板を寄贈しました。昼の休憩時間、校舎とグラウンドの間の空き地に生徒会執行部の皆さんの手で心を込めて植樹されました。

植樹式では、賛助奉仕団の山中委員長から「イトスギ」の説明があった後、贈呈式と植樹を行いました。海田西中学校の生徒会長さんから「青少年赤十字活動を続けていくときの心の支えとしてこのイトスギを育てていきたい。」との言葉がありました。

青少年赤十字賛助奉仕団では、団員が種から育てたイトスギの植樹を県内の加盟校に順次進めています。





イトスギの説明銘板

（賛助奉仕団員の回想） JRCHに出会い50年を越えました

賛助奉仕団副委員長 野田 崇



東日本大震災時

2011年3月11日 東日本

大震災が発生しました。10年間

のスタディーセンター（以下、

SC）の間に、北海道・青森県・岩手県・福島県・宮城県・茨城県・千葉県からのSC野田HR参加者が約20名いました。

震災直後から安否確認の連絡を取りました。その日のうちに14名翌日に5名の安全確認が取れましたが、当時陸前高田高校3年生の生徒の安否確認が取れませんでした。心配しながらの時間が過ぎていききましたが、4日後の15日「私は無事、家の前まで津波が来たけど家も無事、11日は進学先の仙台で下宿探していたときに地震に会った」とメールが届き、全員の無事が確認できました。第2報で「学校は3階超えの津波で破

壊されていた」と津波被害を知らせてくれました。2万6千名を超える死者や行方不明の犠牲者に、驚愕しました。

福島県青少年赤十字指導者講習会に参加

5ヶ月後の8月上旬から、開催を危ぶまれていた「北東北インターハイ」を予定どおり開催されること決定されたので、青森県八戸市で開催された、アーチェリー競技に出場した県立広島工業高校の応援を兼ねて、案内のあった8月11日から開催された「福島県青少年赤十字指導者講習会」に参加することにしました。津波により第1福島原子力発電所が破壊され、放射能被害が拡散した福島県の青少年赤十字指導者の先生方が、「福島原発事故をどのように捉えられているか」を学び、広島の活動に反映する方策の手掛かりを求める参加でした。講習会は、赤十字や青少年赤十字の歴史や基本的認識が中心の内容でしたが、フリーの時間には、震災時や震災後の児童生徒への対応や経験が話題になっていました。災害発災時の取り組みに「児童生徒の安心安全が第1」という課題を頂きました。

放射能被害については、「広島原発に対しての取り組みについて」質問がありました。「広島原子力爆弾と福島原発事故の違いは、超短時間に爆発して大量に放射能を発生させ放射能死に至った広島は80年かけた取り組みによる評価が定まりつつあるが、高レベル放射能を放出した福島原発事故はまだ定まっておらず、今後継続して取り組みと評価をしていく必要がある」と考える。」と返事をしました。

地域防災会への働きかけ

2011年3月11日の東日本大震災と5ヶ月後の福

島を訪ねたことがきっかけになって、私の住む地域の自治会に防災会を結成して地域の防災活動を始めました。結成の理念は、「いかなる時にも人間の尊厳を守る・人道」を置きました。単に防災減災だけでなく、いかなる時も命の大切さに心を寄せてほしいことと、日常生活の安心安全の中に防災を意識してほしいからです。そこで、地域自治会の行事である運動会・夏まつり・餅つき大会を工夫して防災を組み込んだ事業としました。

例えば、運動会では種目名を工夫し、「津波だ逃げろ」障害物競走、「食糧確保」パン食い競争、「資材運搬競争」大ボールリレー」などです。

昼食は日赤広島県支部からハイゼックスの提供を受け、非常食体験はカレーライスです。

夏まつりは、調理機器・防災機器の使用訓練です。大釜2台・フライヤー2台・鉄板焼き器2台・発電機3機・照明機器3台を使用して、参加者に料理を提供します。

餅つき大会は、高齢者の一人世帯につきたての餅を配りと安否確認です。この3大事業は今年で12年目を迎えました。

このような取り組みの必然的経過が防災士でした。2012年から始まった試験ですが、非常勤講師の勤務があり受験の機会がなかったのですが、2019年に機会があり防災士になりました。コロナ禍にあつて、受験資格の「救急法受講証明」講習を防災士受験予定者に実施したこともあって、「廿日市市防災アドバイザー」に要請されました。これらはJRCHや赤十字での体験と知識が自治会活動に役立っていることだと思います。

令和6年度青少年赤十字賛助奉仕団活動報告

幹事長 寺田 宣文

(会場名のないものは日赤広島県支部)

4月16日 第1回役員会 機関誌送作業

4月26日 令和6年度総会

青少年赤十字指導者協議会総会・研修会

6月13日 広島県赤十字奉仕団委員長会議

6月22日 防災教材研修会

7月6日 青少年赤十字指導者研修会

7月10日 (東京・日赤本社)

全国賛助奉仕団協議会役員会

7月11・12日 (東京・日赤本社)

全国賛助奉仕団協議会・総会・分科会

創立60周年記念大会

8月7・8日 (県支部・血液センター)

高校リーダーシップ・トレーニング・センター

(以下、トレセン)

8月9日 小学校トレセン

8月19・20日 中学校トレセン

9月24日 第2回役員会

10月24・25日 (鳥取市、岩美町)

中国・四国ブロック青少年赤十字賛助奉仕団連絡協議会・研修会

10月26日

(広島YMCA)

広島県赤十字大会(分科会)で防災教育講座

11月19日 第3回役員会・機関誌編集会

12月17日 第4回役員会・機関誌編集会

1月28日 機関誌編集会

2月18日 第5回役員会・機関誌編集会

3月25日

青少年赤十字登録式への参加

海田西中学校

山中(賛助)、宇都宮・三ヶ尻(支部)

海田中学校

山中(賛助)、三ヶ尻(支部)

府中学校

山中(賛助)、宇都宮・三ヶ尻(支部)

・保育園まこと学園

宇都宮・三ヶ尻(支部)

・保育所ひかり学園

宇都宮・三ヶ尻(支部)

海田西中学校・いとすぎ植樹式
機関誌送作業・第6回役員会

令和5年度青少年赤十字加盟状況

令和5年度青少年赤十字加盟状況(加盟校数・加盟率)

校種	全国		広島県	
	加盟校数	加盟率(%)	加盟校数	加盟率(%)
幼稚園	597		6	
保育園	1236		16	
認定こども園	543		5	
小学校	7095	37.4	90	19.4
中学校	3465	34.8	78	29.9
高等学校	1734	36.2	40	31.3
特別支援学校	222	18.8	4	22.2
合計	15033	35.9	243	24.6

合計の加盟校数には、上記以外に「義務教育学校・中等教育学校・専修学校・各種学校・通信制・高等専門学校」を含んでいます。

(加盟校数は、本社「令和5年度青少年赤十字概況」から記載)

令和6年度青少年赤十字賛助奉仕団役員

委員長 山中 章敬

副委員長 野田 崇 (兼) 寺田 宣文

幹事長 寺田 宣文

会計幹事 下野 玲子

幹事 河野 和夫 原田 樹雄

監事 采谷 宣子 吉丸 朝美

顧問 河戸 靖子 光本 涼子

田中 博 日高 敬司

水野 善親

編集後記

今年度は前述のとおり、JRC賛助奉仕団結成60周年となり全国では盛大な式典が開催されました。しかし、コロナ禍の影響で加盟校は減少しています。広島県支部ではJRCの後押しを兼ねて、JRC県大会から赤十字県大会へと替わりました。支部では新しい企画も考えられており、私たちも一層後押しをしていきたいと思っています。

イトスギの植樹は関係者が卒業や転勤されると分かんなくなりますので、今年から銘板を作製しました。既にお贈りした学校にも順次お配りする予定です。

広島県防災教材プログラムのホームページ化が遅れておりますが、まもなくできあがる予定です。できあがれば、講習会の実施や学校に出向いてPRして参ろうと思っておりますので、その際はよろしく願いたします。

編集委員

下野玲子、寺田宣文、野田 崇、日高敬司、山中章敬